＜協同のひろば＞

協同の力で学校づくりの大きな輪を

――愛知・黄柳野高校、設立準備のとりくみ――

神谷吉保（黄柳野高等学校設立準備委員会）

1993年4月開校を目指して準備している黄柳野（つげの）高校は、多くの方々の「協同」の力でつくろうというものです。

新しい学校――黄柳野高校は、“人間としての自立”をめざしています。全寮制による深い人間的結びつきを基礎に、生徒自身が参加する授業、労働体験、自分達の五感を使っての創造活動、サークル・交流等の自主活動等総合的な営みを通して生徒の自立をめざします。この高校では、生徒一人ひとりが主人公です。どの生徒も「わかりたい」「もっと知りたい」と思っています。できる限り少人数の授業になるようにし、しっかりとした基礎学力が身につくようにします。また、生徒が持っている可能性や力を伸ばすためにもさまざまな選択講座を設けたいと思います。

教科書だけで学んだ知識、試験の点数を上げるために詰め込んだ知識では、たくましく生きる力にはならないと思います。さまざまな労働体験、地域の人々が生活の中で培ってきた知恵、自らの体を通して得た体験等これらが学んだ知識と結びついたとき本物の学習ができると思います。地域には、豊かな生活体験を持った人が大勢います。いろいろな方々の協力を得て農業・林業・工業などの労働や学習を通して労働の厳しさと喜び社会のことなど学べるようにします。

鳳来町は民俗芸能の宝庫ともいわれています。生活が作りあげた文化、音楽や演劇、木工や陶芸などをできる限り取り入れて行きたいと思います。

いろいろなクラブ・サークル活動、生徒会活動、他校との積極的な交流など生徒の自主的活動は、「自立」にとって欠くことはできません。自らが企画し、やり遂げていくことを通して自信と連帯・協同の心を育んでいきます。

月曜日から金曜日までは寮での生活をします。友人との共同生活、地域の人々との交流を通して人と人との関わりを学びます。そして、自律の精神を育みます。土・日曜日は家に帰り親子の絆を確かなものにします。

地元鳳来町黄柳野の方々は大変暖かく迎えてくださっています。豊かな自然に囲まれた人情味ある土地です。地域の人々と知恵と経験が学習に生かされるようにしたいと思います。地域とともにつくりだす学校にしたと思います。

この学校の基本は、「協同の力で子どもたちを育んでいこう」というものです。教育や学校が閉鎖されたものではなく、いつも地域や父母、国民に開放され、より良い教育の実現のために多くの人々が協同できるものでなくてはならないと思います。私たちは、学校の建設の段階から大勢の方々の参加ですすめるようとりくんでいます。

カリキュラム、授業内容も子どもや父母、多くの人たちの声や要求を基礎につくりあげていきたいと考えています。そのためにも、地元愛知を初め東京等各地でいろいろな方々に集まっていただき様々な意見を伺いたいと思います。

小規模といっても一つの学校を設立するには膨大な資金が必要です。（約15億円　寄付金は約11億円、他は県の補助や私学振興財団の融資）。いま、全国から寄せられてきています。あと数億円までできました。黒柳徹子さん、山田洋次さん、ジェームス三木さん、上條恒彦さんら1万人を越える賛同が寄せられています。また、地元や全国の方々が、この学校づくりを支え応援しようと「人間教育をすすめる学園を共につくる会」をつくり、講演会や懇談会、会報の発行など多彩な活動をしています。こうして、小さな学校づくりが大きな輪になり、協同の力がひろがっています。私たちは、これを一番の基本に頑張りたいと思います。どうかご支援をお願いいたします。

（詳しくは、同封資料を参考にして下さい）

労働運動研究会第２回夏期合宿を終えて

涌　井　謙　一（東京都／労働運動研究会運営委員）

労働運動研究会は９月14、15日と会員制の研究会としてスタート（87年12月）してから２回目の夏期合宿を開催しました。合宿は「会員の職場・組合からの実践の報告と交流」、「協同総合研究所の菅野氏からの労働者協同組合運動についてのお話と・学習」という２本立てで行ないました。以下１日目に行われた会員の職場・組合からの実践の報告を紹介します。報告は、１．化学産業の組合における民主的労働組合運動を目指した実践、２．印刷産業における時短の取組み、３．自治労運動と地域作り、４．建設産業における高齢化社会への対応の取組み、の４本です。

第１の報告では、1975年の組合結成から「総討論・総対話・総参加」という民主的労働組合運動を目指した組合活動の歴史が紹介され、①これまでの取組みの成果と、その一方で中央執行委員会の方針を各職場で受動的に論議する傾向が生じてくる中で、再度各職場からの意見を出発点とする取組み、②生活保障の賃金要求から、〝生活を作るという立場〟からの賃金闘争への取組み。〝豊かな生活〟を自ら設計し、その設計に向けての主体的な賃金闘争と、各世代毎の〝豊かさ〟の議論の取組み、③組合結成の原動力となった〝職務給による賃金格差〟是正の取組みと、その結果としての賃金制度へ近年提起されてきた「能力評価がまったく加味されていない」「退職金では大卒者の方が低くなり生涯賃金という観点からおかしい」といった疑問から始まった賃金制度の議論の紹介と、〝働きがい〟という観点からの賃金のあり方・見方の模索、などが報告されました。

第２の報告では、「３Ｋ産業の一つ」といわれる印刷産業は、長時間労働・低賃金の代表的産業の一つで、一方で技術革新が急速に進みながら、他方で人手不足のために雑誌などの発行が遅れるという矛盾が現れてきていること、印刷産業で働く者の中でも時短が大きな要求となっているとの状況、次いで会員が働いている中小企業での土曜休日１日増の組合の取組みが報告されました。組合が単に経営側へ時短を要求するだけでなく、時短を実現するための具体的な政策が問われていること、組合の技術革新への対応力の形成、技術教育の問題、また「お客さん」の側になる出版・新聞産業からの仕事の発注とそこで働く人々・組合との連帯の問題、技術革新の中での高齢者の問題など検討すべき多くの課題が報告されました。

第３の報告では、自治体労働者の仕事の捕らえ返しと、その中で「納得がいく仕事がしたい」自治体労働者と市民の生活利益は途中で食い違いはあっても最終的には一致するとの立場の確認と、その下での労働組合の実践が報告されました。具体的には〝福祉〟におけるホームヘルパー増員に向けた取組み。「学校給食」での低農薬野菜の使用、合成洗剤から石鹸への使用の取組み、環境問題としてゴミ収集のあり方・リサイクルへの取組みなどが報告されました。

第４の報告は、住宅を供給する側に立つ建設産業の組合からすれば、快適で安全な住宅を適正な価格で供給することが仕事に対する喜びであるとの仕事の捕らえ返し、一方現実には住宅が高齢者にとって住みずらいものであるとの反省、また、現在の住宅は健康な成人を規準に設計されているので高齢者のみならず幼児・妊婦・障害者・病弱な者を想定していない構造であること、それは住宅だけでなく街の設計そのものもまたそうであること、その意味で、生活の基盤である住宅・地域との関わりをもう一度労働組合として考える必要性が提案されました。そして、江東区における高齢化社会への自治体の対応策と一体となった組合の活動、自治体の住宅政策に労働組合の側からの意見を反映させている実践例が報告されました。

協同総研シンポジウムのお知らせ

協同組合セクターはオルタナティブか
――『自立と協同の経済システム』をめぐって――

日　時　：　1991年12月14日（土）　午後1時30分～5時
会　場　：　京都大学、京大会館
（京都市左京区吉田河原町15番地／地下鉄今出川駅よりバス、タクシー）
内　容　：　①挨拶と問題提起　黒川俊雄（慶応大学名誉教授、協同総研理事長）
②報　　告　野澤正徳（京都大学経済学部）　角瀬保雄（法政大学経営学部）
大西　広（京都大学経済学部）　富沢賢治（一橋大学経済研究所）
成瀬龍夫（滋賀大学経済学部）
③会場討論と報告者によるまとめ
主　催　：　協同総合研究所
（東京都新宿区高田馬場 4-2-31　TEL. 03-5389-6401）
後　援　：　基礎経済科学研究所
（京都市上京区河原町通今出川下る 芝山ビル　TEL. 075-255-2450）

＝よ　び　か　け＝

○ソ連、東欧の激動と、「資本主義万歳」論が声高に叫ばれる中で、野澤正徳、木下滋、大西広氏編による『自立と協同の経済システム』（大月書店）が刊行されました。従来の「社会主義」を根本的に検討し、めざすべき社会像を再構築しようとする先駆的な労作です。

○過労死に至る「企業社会」の倒錯や、地球環境の破壊という、資本主義の生みだす人類的な危機を直視する本書は、「資本主義万歳」論をとるものではありません。スウェーデン型社会民主主義に一定の共感をよせつつも、そこに留まることもできないという立場です。

○これに替わる方向として、著者たちがうちだすのが、「自立と協同の経済システム」――自立・自由を基礎とし、協同・連帯がつらぬかれる経済システムです。「労働者が主人公になる」協同企業と「民主主義的市場メカニズム」、あらゆる面からの公共性の保障です。著者たちは、「悩み、模索する人々」であることを率直に自認しつつ、この経済システム像が、いろいろな運動、団体に携わる多くの人の手で練り上げられることを期待しています。

○このような誠実な問題提起をしっかりと受けとめながら、本シンポジウムでは、京都と東京の研究者の報告を中心に、「自立と協同の経済システム」の実際の姿はどのようなものなのか、どのような担い手と道すじを通じて、そこに接近することができるのかを討議します。とりわけ、東京からは労働者協同組合や協同組合セクターについての提起提起を行ないます。

○はたして、それはオルタナティブとなりうるか、論争をも期待しつつ、「元気の出る集会」にしたいと思います。多くの研究者と実践家の参加と論議をお願いします。

○11月には宣伝のチラシなどができあがりますので、会員の皆様のご協力を期待しております。お問い合せなどは研究所までご一報ください。